

学校名	埼玉県立常盤高等学校
-----	------------

平成 29 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール 事業計画書

I 委託事業の内容

1. 研究開発課題名

5 年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発

～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～

2. 研究の目的

本研究では、看護専門職者に求められる力は、新たな医療技術の進歩や社会の変化に柔軟に対応するために必要な「生涯学び続ける力」であるという考えにもとづき、様々な取組を行っている。「生涯学び続ける力」は、その要素である広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」における各取組で身につけた力を統合し、新たな課題を発見し自ら解決する力であると捉えている。本研究の目的は、「生涯にわたって看護の専門性を追求し続ける力」を身につけ、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することである。そのために、これまでの教育活動を見直すとともに、これらの力が身につくようなプログラム開発を行うことに重点を置いてきた。

3. 実施期間

契約日から平成 30 年 3 月 15 日まで

※ 最長で当該年度の 3 月 15 日（3 月 15 日が行政機関の休日に当たる場合は直前の開庁日）まで

4. 当該年度における実施計画

これまでの 3 年間で取り組んできたことは、主に高校部分においてシラバスに取り入れ定着していることから、継続実施していく。今年度は、指定時に入学してきた生徒たちが専攻科に進級するため、活動を深化させ取組を評価しシラバスの中に取り入れていく。専攻科では、これまでの 3 年間で生徒が身につけた力を実践する時期と捉え、昨年作成した「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」などを活用して生徒の「育てたい力」の変容と、これまでの取組の成果を評価していく。高校においては、これまで定着している取組は内容を精選し継続して実施する。

1) 評価について

(1) SPHの取組全体の評価

本校では、初年度より鈴木敏恵氏の「総合的な学習プロジェクト学習ポートフォリオシート集（教育同人社）」の「プロジェクト学習で身につく力30項目¹⁾」をSPHで「育てたい力（評価の視点）」として取組全体の評価を行っている。SPHのターゲット学年である「平成26年度入学生」の5年間の変化を調査、分析していく。

SPHの各取組における評価の視点は、平成26年度入学生（SPH指定時）の1年生終了時の「育てたい力（評価の視点）」30項目の結果をもとに育てたい力を決定した。「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」の評価の視点には、看護の視点を加えるために独自の指標も加えている。

「育てたい力（評価の視点）」30項目（定量評価）は、生徒の主観的な成長が反映されるものであるが、2年間の結果から主観的な評価に頼るため、学年が上がるにつれて自分を客観視できるようになり自己評価が厳しくなると、成長が結果に反映されない事が見えてきた。そこで、その差を補うものとして、生涯学び続ける「看護専門職者」を目指す生徒が専攻科修了までに目標とする姿を「臨地実習における行動」として「ありたい像」を具体的に示した「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を用いて生徒の変容を定性的に評価することとした。

		SPHで「育てたい力」 (育てたい力)		SPHで身につく力～実習ルーブリック ～ありたい像～
		鈴木敏恵氏 「プロジェクト学習で身につく力30項目」	各取組で「育てたい力」	
(常盤高校が考える豊かな人間性)	<ul style="list-style-type: none"> 社会への参画力 事態への対応力 礼節 共有する力 時代の事象を見る力 情報の取捨選択力 事故決定力 状況判断力 	他者を尊重する○	人の話をよく聞きその内容をもとに他者を尊重し、他者に配慮し、倫理にもとづいた行動ができる。	
		協調性○	場の状況をよみ自分の役割を理解し、その役割を果たすことができる。	
		自己理解、高い志、折れない心○	粘り強くあきらめずに取り組むことができる。	
		感性が豊か 協調性○	他者の立場に立って思いを汲み取り、優しく思いやりのある行動ができる。	
		社会人の基本スキル○	社会の一員として良識を持ち、規範を守り、責任のある行動をとることができる。	
確かな知識・技術	<ul style="list-style-type: none"> 情報活用能力 	臨地のイメージ力△	援助においてプロセスや成果をイメージし、実施できる。	
		知識力・技術力△	既習の知識が定着し、またさらに知識を得ようと自発的に意欲的に学習できる。 必要な看護技術を習得し、安全・安楽に実施できる。	
		情報活用能力（情報スキル）	必要な情報を最適な方法で収集し、分析や判断に活かすことができる。	
科学的思考・判断力	<ul style="list-style-type: none"> 情報を見極める力 思考スキル 論理的に考える力 	論理的に考える力	専門知識を最大限活用して現象を的確に捉え、論理的に考えて判断することがき、かつ、適切な表現で記録することができる。	
		科学的視点（思考スキル）△	看護実践において科学的根拠や有効性・妥当性を考え、対象にとって最も適した看護の方法を考えることができる。	
		文献検索力（情報を見極める力）△	臨地実習を通して感じた疑問から、研究課題を見出し、文献検討して、研究疑問を精練することができる。	

		クリティカルシンキング（論理的に考える力）△	クリティカルな視点で看護実践を振り返り、効果と妥当性を評価・考察し、次の実践に向けて新たな検討ができる。
（3つを統合して得る力） 生涯学び続ける力	・イメージする力 ・課題発見力 ・課題解決力 ・コミュニケーション力 ・プレゼンテーション力	イメージする力	自分がこれからすることを具体的に思い浮かべ、先を予測できる。
		課題発見力	自分の現状を見て問題点を見いだせる。
		課題解決力	目の前の状況を見て自分の問題を発見し、知恵を出して解決・実行できる。
		コミュニケーション力	自分の考えや気持ちを相手と交換できる。
		プレゼンテーション力	自分の伝えたいことを表現し、相手を納得させることができる。
	<他の項目> 戦略力、計画力、遂行力、情報の取捨選択力、表現力、提案力、他者から学ぶ力、デザイン力、推こむ力、自己評価力、相互評価力、自己成長力、自己肯定力		

○印は「常盤高校が考える豊かな人間性」、△印は、本校独自の指標

（2）評価の方法

a. 「育てたい力（評価の視点）」30項目について

学年末の3月に「4月の自分と比較して、次の力は身についたと思いますか」というアンケートを行い、「とてもついた」「ある程度ついた」「あまりつかなかった」「全くつかなかった」の4段階で回答を得る。回答の結果から、「とてもついた」「ある程度ついた」のポジティブな回答をした生徒の割合を比較し、生徒の変容を分析する。分析には、「統計解析用ソフトウェア IBM SPSS Statistics 22」を使用する。

b. SPHで身につく力～実習ルーブリック～について

高校3年生、専攻科1年生、2年生の各学年の最後の実習終了時に自己と他者（引率教員）で行い、その後に生徒と引率教員が面談をし、実習における自己の行動を客観的に振り返るとともに、身についた力の確認や今後の課題について確認していく。生徒の変容や、自己評価と教員による他者評価の差に関連する分析には、「統計解析用ソフトウェア IBM SPSS Statistics 22 及び Text Analytics for Surveys」を使用する。

(3) 各活動の評価の視点

a. 「豊かな人間性」を育てる取組

●生徒の自己評価

育てたい力	評価の観点	目標値
時代の事象を見る力	社会のできごとに関心をもって見ようとする力	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と肯定的な回答をした生徒の割合が80%となることを目標値とする。
情報の取捨選択力	目的に合った情報を選びとれる力	
自己決定力	自分の考えで物事を決める事ができる力	
状況判断力	相手やその場の様子をつかみ、どうしたらよいか決められる力	
社会への参画力	自ら体験する活動を選び、申し込むことができる。地域における活動のニーズを把握できる。	
事態への対応力	周囲の状況を判断しその場に合わせた行動を取ることができる。	
礼 節	様々な年代の人と交流し、相手の心や状況をふまえた行動や作法ができる。他人のために尽くす奉仕の心を持つことができる。	
共有する力	一人一人が持っている知識や経験を出し合い、分かち合うことができる。	

●定性評価

定量評価を補足するための評価として、授業前後の記載内容の変化についてカテゴリ化などを用いて分析し評価する。また、活動全体の評価として、「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を用いて生徒の変容を評価する。全教員が参加した研修でまとめられた「常盤高校が考える豊かな人間性」をもとに「他者を尊重する」「協調性」「自己理解、高い志、折れない心」「感性が豊か、協調性」「社会人の基本スキル」に関する「ありたい像」があげられている。

b. 「確かな知識・技術」を育てる取組

これまで本校で作成し使用している看護技術の評価基準をもとにして作成した、各学年における技術の到達目標を使用し、生徒が自ら技術の到達度を可視化し評価できるようにする。これらは校内のみでの達成度ではなく、臨地実習においても活用できるものとする。新たな評価方法により各学年が目指す目標値を、100%の生徒が達成することとする。

●生徒の自己評価

肯定的な回答をした生徒の割合

育てたい力	評価の観点	目標値 (%)				
		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
情報活用能力	授業の予習復習にナースングスキルを有益に活用できる。	90%	90%	100%	—	—
	看護援助技術手順書作成にナースングスキルを有益に活用できる。	80%	90%	100%	100%	100%
	タブレットを用いて、看護援助技術映像等を視聴し、技術イメージ化できる。	—	80%	80%	80%	80%
	タブレットを用いて、自分の実技を録画し視聴することで、自分の援助技術を振り返ることができる。	—	80%	80%	80%	80%

育てたい力	評価の観点	目標値 (%)
臨地のイメージ力	病院実習のイメージが付き、不安を軽減でき、前向きに病院実習に取り組める。	100%
知 識 力	既習の知識が定着し、またさらに知識を得ようと自発的に意欲的に学習できる。	100%
技 術 力	必要な看護技術を習得し、安全・安楽に実施できる。	100%

●定性評価

生徒の感想などからカテゴリ化などを用いて「臨床のイメージ力」等に関連した記載内容を分析し評価していく。また、活動全体の評価として、「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を用いて生徒の変容を評価する。

c. 「科学的思考・判断力」を育てる取組

●生徒の自己評価

育てたい力	評価の観点	目標値
情報を見極める力	その情報が真実かどうか考え、判断する力	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と回答した生徒の割合が80%となることを目標とする。
思考スキル	解決するために無駄なものを捨て、重要な事実をもとに考えを組み立てる力	
論理的に考える力	自分の頭と自分の意志で筋道を立てて考える力	

●教員による客観的評価（科学的思考・判断力の活動を通して育てたい力）

育てたい力	評価の観点	目標値 (%)
科学的視点	授業（実験的体験・専門性の高い講座の受講）を通して看護実践におけるエビデンスの大切さがわかる。	高校2年の100%
文献検索する力	学術論文について、検索エンジンを使った初歩的な文献検索ができる。	高校3年の100%
データ処理する力	初歩的なデータ処理の方法がわかる（平均値・標準偏差・相関係数）。	高校3年の100%
クリティークする力	研究論文を読んで、クリティークの視点にそって考え、意見や考えを述べることができる。	専攻科1年の100%

●「クリティークする力」のルーブリック評価

	目標	5	4	3	2	1
クリティークする力	研究論文の内容を理解することができ、研究方法や研究プロセスの妥当性などをクリティカルに考え、論理的・多角的に自分の意見や考えを述べることができる。学術的価値について正しく評価できる。	論文を精読して理解し、クリティカルに論文の価値を判断しており、具体的に指摘しながら論理的・多角的に自分の意見や考えが述べられている。研究のプロセスの妥当性を正しく評価している。	クリティークの視点で論文を読み、研究プロセスの妥当性や価値について判断しており、自分の意見や考えが具体的に述べられている。	クリティークの視点で論文を読み、研究プロセスの妥当性や価値について、部分的に自分の意見や考えが述べられている。	クリティークの視点に沿って考え、評価しているが、具体的に自分の意見や考えを述べるには至らない。	未記入部分が多い、または、クリティークの視点を意識した記述になっていない。

●「ケース・スタディ」ルーブリック評価

評価項目	目標	優（3点）	良（2点）	可（1点）
表題	研究内容を端的に表現することができる	研究内容を端的に表現し、このケース・スタディで主張する内容が明確に示されている	端的とは言えないが、このケース・スタディで主張する内容がある程度把握できる	漠然としているあるいは、内容を表現しているとは言えない
序論	先行研究や分析の基盤とする理論・概念枠組みなどを示し、動機や目的が明確に述べることができる	ケース・スタディをするに至った動機や目的が明確に述べられている	明確とは言えないが、研究動機や目的がある程度述べられている	動機や目的が曖昧で「序論」として妥当な内容とは言えない
方法	研究方法／倫理的配慮に関する記述があり、かつ、どのようなデータをどのように分析・検討するかが明確に示すことができる	研究方法／倫理的配慮に関する記述があり、かつ、どのようなデータをどのように分析・検討するかが明確に示されている	研究方法／倫理的配慮に関する記述が一通り揃っている	研究方法／倫理的配慮に関する記述のいずれかに不備・不足がある
事例紹介	ケース・スタディを読み進めるのに必要な情報を過不足なく、簡潔に記述することができる	入院前・入院中の経過や個人的背景など、ケース・スタディを読み進めるのに必要な情報が過不足なく、簡潔に記述されている	入院前・入院中の経過や個人的背景が、ある程度整理して記述されているが、不足な情報があり、不要と思われる情報も含まれている	入院前・入院中の経過や個人的背景の記述が不十分、あるいは未整理である
看護の実際	アセスメントや看護問題、目標が簡潔に記述され、看護過程が、具体的・客観的に表すことができる 看護実践の「事実」を読者がイメージしやすいようにわかりやすくまとめ、看護の「結果」が研究目的に沿って、明確に、客観的に示すことができる	テーマに沿った情報の取捨選択、アセスメントや看護問題、目標等、一連の看護過程がテーマに沿ってまとめられ、記述されている	テーマに沿った情報の取捨選択は十分ではない、あるいは、多少の不備はあるが、看護過程がある程度記述されている	看護過程の記述内容に不備が多い テーマとは関連の薄い記述内容である
		看護実践がまとめられており、看護の「結果」が研究目的に沿って示されている 主観的要素が混入していない	整理されているとは言えないが、看護の「結果」が示されている 事実に基づかない記述や主観的要素が混入している	看護の「結果」がわかりにくい 事実に基づかない記述内容である
考察	多くの適切な文献を参照して、看護実践の妥当性を多角的・客観的に検討できる 「看護の実際と結果」をふまえ、「方法」で示された分析方法によって論理的、多角的に考察できる	複数の適切な文献を参照して、看護実践の妥当性を多角的・客観的に検討している	複数の文献を参照してはいるが、看護実践の妥当性の検討は十分とは言えない	関連の乏しい文献を用いており、適切な文献を参照しているとは言えない
		看護実践の結果に基づいた論理的な考察内容で、理論の飛躍がない 看護実践が混入していない	部分的には考察できている 看護実践に基づいていない 分析内容が含まれている	論理性に乏しい 実践と無関係な分析をしている、または、分析できていない
結論	序論に呼应し、研究によって得られた知見や研究の要旨を簡潔に示し、今後の課題を述べることができる	序論に呼应しており、研究によって得られた新たな知見のまとめが、形式に合わせて記述されている	序論とある程度呼应しており、研究のまとめとして、形式に合わせて記述されている	序論に呼应しておらず、感想文・反省文・決意文のような記述内容である
文献	多数の適切な文献を用い、リストには、著者、論文名、雑誌名、などを正しく記載することができる	多数の適切な文献を用い、ルールに従って正しく文献引用できている リストには著者、論文名、雑誌名、などが正しく記載されている	2～3の正式に公表されている文献を用い、ルールに従って正しく文献引用ができている 著者、論文名、雑誌名、などが正しく記載されている	文献が1つ、あるいは教科書や公表されていない文献（先輩の研究等）しか用いていない または、文献引用や文献リストが正しく記載されていない

「科学的思考・判断力」を育てる取組全体の評価として、「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を用いて生徒の変容を評価する。

d. 「生涯学び続ける力」を育てる取組

ア) ポートフォリオの活用

当該活動は、生徒の自己肯定感や看護師としてのキャリア意識の涵養を図るといふねらいがあり、ポートフォリオの中身について評価の対象としないことが適当と判断した。

イ) プロジェクト学習

● 定量評価

育てたい力	評価の観点	目標値
イメージする力	先を想像し、具体的に予測することができる。	1年間で身についた力を「とてもついた」「ある程度ついた」と回答した生徒の割合が80%以上となることを目標とする。
課題発見力	状況を判断し、課題を見いだすことができる。	
課題解決力	最善の方法を見いだし解決することができる。	
コミュニケーション力	他者と意見を交換し、共有することができる。	
プレゼンテーション力	伝えたいことを表現し相手を納得させることができる。	

● 定性評価

生徒は「成長エントリー」として、学年末に自分が1年間で成長したことや、具体的な行動変容を書き出しながら振り返りを行う。定量評価を補足するための評価として、「成長エントリー」や感想などからテキストマイニング等の手法を用いて、具体的にどのような力がついたと感じているのかについて生徒の変容に関する記載内容の変化を分析して評価する。

2) 各取組について

(1) シラバスに取入れたSPH活動

	豊かな人間性	確かな知識・技術	科学的思考・判断力	生涯学び続ける力	
高校1年	「地域活動体験」夏休みの課題として実施	基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業 シミュレーション学習、協調学習 実技コンテスト	基礎看護 大学連携講座(県立大学) 実験的な取組	基礎看護 防災プロジェクト ナインゲールプロジェクト
		基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業 シミュレーション学習、協調学習 実技コンテスト	基礎看護 栄養 情報活用	基礎看護 ナース・アートプロジェクト
		成人看護	専門家による特別講座(放射線、感染管理) 専門家による特別講座(フィアス、災害看護) 専門家による特別講座(放射線、がん看護)	看護研究講座 薬理	精神保健 基礎看護
専攻科1年	各領域 倫理に関する授業 看護観を育てる授業	統合	実技テスト	統合 看護研究	ヘルスプロモーション ヘルスプロジェクト
		ICT活用、シミュレーションなどによるアクティブラーニングを実践中	看護研究	看護研究	
専攻科2年	各領域 倫理に関する授業				

高校3年間の取組については、平成27年度末までにシラバスに入れ、平成28年度に実施、評価し、これまでの実践にもとづき継続可能であることが確認できている。今年度以降は、専攻科でのシラバスに取り入れた内容を主に評価、修正しシラバスへの定着を図る。

(2) 「豊かな人間性」を育てる取組

地域で行われている様々な活動等を通して地域で行われている活動を知り、奉仕の心を育て、命の大切さについて考える豊かな人間性を養うとともに、自律した思考に基づいた倫理的な判断力を持ち、広い視野に立った看護観の確立を目指している。自己理解や他者理解を深め相手を尊重し思いやりのある心を持ち、自他の生命を尊重する態度を養い、看護のみならず広い視野に立ち人間を理解することのできる人間性を身につけることをねらいとする。各活動における「育てたい力」を通して、自律した思考に基づいた倫理的な判断力を持ち、新たな時代や場面に応じた対応ができる力を身につけることを目指す。今年度は、これまで先行的に実施してきた「看護観を育てる取組」の「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」を中心に評価していく。

a. 活動のねらい（学年別）

	夏休み地域活動体験	看護観を育てる取組 (ライフステージからみた生命倫理に関する授業)	
育てたい力	・社会への参画 ・事態への対応力 ・礼節 ・共有する力	・時代の事象を見る力 ・情報の取捨選択力 ・自己決定力 ・状況判断力	
高校1年	地域で行われている活動を知る。年代の異なる人とのかかわりの中で相手を思いやる心や奉仕の心を育てる。 自分の経験を他者に伝えることができる。	協力、責任感、連携など人との関係やチームの一員としての立場を考えた行動をとることができる。 看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。	
高校2年	地域での活動体験を通して、他者を尊重する事の大切さや、自分の果たせる役割について考えることができる。 看護での学びを活かした活動について考えることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う（SPHでの取組はなし）。	
高校3年	看護での学びを生かした地域活動体験を行う。周囲の状況を判断し、その場に合わせた行動をとることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う（SPHでの取組はなし）。	
専攻科1年	看護での学びを生かした地域活動体験を行い、経験を通して、自分なりの看護観を持つ。	人生各期において生命倫理における課題や問題点があることを理解する。 宮城県への宿泊研修により、被災地の現状を知り、理解を深め自分にできることを考えることができる。	信頼関係を構築するためのコミュニケーションに関する基礎的な知識と技術を習得させる。
専攻科2年		臨地実習において、これまでに身につけた、倫理観や看護観に基づいた看護を実践する。	精神面を充実し、看護の職業に従事する者として、人間関係を円滑に保つためのコミュニケーションを実践する。

b. 活動の概要

ア) 看護観を養う取組～ライフステージからみた生命倫理に関する授業（専攻科1、2年生）

各ライフステージに生じる生命倫理に関連した問題を知り、自分のこととして考え、意見を持つことを目指し、生まれてから亡くなるまでに起こりうる倫理上の問題を考え倫理的ジレンマを感じられる授業への転換を行っている。専攻科で行われている看護科目の各領域の中で生命倫理を扱う単元を関連付け、授業を同時期に行うように授業を配置している。また授業の進め方を一斉講義の授業形態

から、視聴覚教材などの活用により生徒が主体的に考えることを促す指導方法への転換を図っている。生徒は倫理的ジレンマを感じ、広い視野から物事を考える力を養い、自分の意見を持ち看護観を養うことを目指す。

昨年度の成果から、生徒が身近に考えられる事例では、意見交換が活発に行われている事、様々な立場があることに気づき視野が広がることが見えてきた。今年度は、事例の提示の仕方や、グループワークの内容をより深化させる予定である。さらに、学習に系統性をもたらすシラバスの在り方を継続して検討する。

＜各領域のテーマ＞

領域	科目	学年	テーマ
成人	成人臨床看護	専攻科1年生	致死性不整脈への治療・看護を中止するタイミングについて
基礎	基礎看護Ⅰ	専攻科1年生	代理出産を考える
在宅	在宅看護技術	専攻科1年生	A L S 患者の呼吸器使用の選択について
統合	医療安全	専攻科1年生	医療安全に関すること
母性	母性保健	専攻科2年生	出生前診断陽性で「生む」を選んだ親への意思決定を支える
精神	精神保健	専攻科2年生	地域に住む精神障害者への支援
老年	老年保健	専攻科2年生	「人生の最期をどう迎えるか」を考える
小児	小児保健	専攻科2年生	「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」について

イ) 宮城県での宿泊研修（専攻科1年生）

昨年まで実施していた、ボランティア・スタディツアーで宮城県や岩手県を訪れた成果を活かし、少しでも多くの生徒に被災地を訪れる経験をさせるために、今年度は、専攻科1年生が宿泊研修を宮城県仙台市で実施する予定である。被災地の見学や、閑上地区、荒浜地区で語り部による体験談、石巻赤十字病院の看護師による「病院における災害看護の実際」についての講義を計画している。昨年度、ボランティア・スタディツアーに参加した生徒によるオリエンテーションなど、事前学習を行い研修に臨む。

(3) 「確かな知識技術」を育てる取組

臨床に即した看護実践能力を育てるために、ICTを活用したアクティブラーニングの実践を通して、自発的な学習を目指し、確かな知識の定着を目指している。また、専門家による授業を、高校生から取り入れ、知識、技術に基づいた応用力・実践力を育てることを目指している。また、これまで学年単位で実施していた実技の評価を、学年毎に継続性を持たせ段階をふまえたものとし、技術の定着を目指すために昨年度作成した「学年に応じた技術の統合実践の評価」を実践していく。

a. 確かな知識・技術の活動のねらい

	ICTを活用したアクティブラーニングによる授業の開発	専門家による特別授業	学年に応じた技術の統合実践の評価法の開発
育てたい力	・情報活用能力	・臨地のイメージ力 ・知識・技術力	・臨地のイメージ力 ・知識・技術力 ・情報活用能力
高校1年	基礎看護の予習復習にナースングスキルを活用し、基礎的な知識・技術を身につけることがで		基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取り組む。原理原則を理解した上で実施で

	きる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。		きることを目標に日常生活援助技術を身につける。
高校 2年	基礎看護の予習復習にナースングスキルを活用するとともに、臨地実習時に患者のケアに役立てることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	臨地実習のイメージが付き、不安を軽減できる。 認定看護師等の授業を通して、患者が療養生活を送る中で、医療事故の発生を回避するための知識・技術をイメージすることができる。併せて生徒自身の危険性を予測し、感染や放射線曝露から身を守ることができる。	基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取り組む。患者の環境を整え、安全・安楽を考えて実施できることを目標に、臨地実習で求められる基礎的な看護技術の定着を計る。
高校 3年	基礎看護の予習復習にナースングスキルを活用する。また、臨地実習を通して、受け持ち患者の状況に応じた援助を考えることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	専門家による講座を受け、これまでの知識を関連づけ臨地（病院・災害時）をイメージするとともに、専攻科での専門家による授業への準備を進める。	基礎看護における「看護技術テスト」に個人で取り組む。患者の個別性を重視し、決められた状況に応じて実施できることを目標に、臨地実習で求められる応用的な看護技術の定着を計る。
専攻科 1年	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考えることができる。		「技術の統合Ⅰ」で患者を想定した事例に合わせた実技試験を実施する。臨床をイメージし状況に応じて実施できることを目指す。
専攻科 2年	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考え、実施し評価することができる。		「技術の統合Ⅱ」で多重課題の場を想定した実技試験を実施する。多重課題において優先順位を考えたいうで実施できることを目指す。

b. 活動の概要

ア) 学年に応じた技術の統合実践の評価法の開発（高校3年生～専攻科2年生）

本校では、技術力を高め、基礎看護技術の定着と向上、実践力を身につけるために、看護技術のチェックリストを取り入れながらこれまで各学年において技術の評価を行ってきた。しかし、学年ごとで目標としている到達度と5年間終了時での習得の到達度が可視化されておらず、生徒自身も技術の習得と成長の過程が見えにくい状態であった。そのため、学年ごとの到達度を明確にし、技術の習得のレベルに段階をつけ、全体像を明確にした。高校1年生では、「技術の原理原則を理解できた上で実施できる」、高校2年生では「患者の環境を整え、安全・安楽を考えて実施できる」、高校3年生では「患者の個別性を重視し、決められた状況に応じて実施できる」とした。高校3年間で基本的な看護技術が習得できるように段階をつけた。また専攻科ではさらに患者の個別性やその場の状況を判断して技術の実施ができ、専攻科修了後に活用できるレベルであるために専攻科1年生では「臨床をイメージし状況に応じて、実施できる」、専攻科2年生では「多重課題において優先順位を考えた上で実施できる」とした。さらに同じ看護技術を学年に応じて患者の設定や環境に条件をつけ、課題を増やし、段階をつけた統合実践を評価する。「寝衣交換」「シーツ交換」「移乗」の看護実践で行うことの多い3つの看護技術をピックアップし、生徒自身がスキルアップしていることを確認できるように到達度を示した。これにより、生徒が、これまで行ってきたICTを活用した自己の技術の振り返りやシミュレーションの授業と重ねて、自分の成長過程や臨地実習の対象をイメージし、自己練習に積極的に取り組むことを期待している。また、それぞれの評価の項目を具体的にしたもの評価表として使い、昨年度から学年末に高校1年生では「日常生活援助技術」、2年生では「臨地実習で

求められる基礎的な看護技術」の定着を目指してチームで「看護技術コンテスト」を行う。高校3年生では、専攻科へ進級する前に「臨地実習で求められる応用的な看護技術」の定着を目指して統合実技演習を実施する。専攻科では専攻科1年生で「フィジカルアセスメント」や「実際の患者を想定した看護技術テスト」、専攻科2年生では「統合実技演習の場面」や「多重課題への取組」でこの評価表を活用していく。

(4) 「科学的思考・判断力」を育てる取組

研究的視点を取り入れた授業や学習活動を通して科学的な思考・判断力を養い、看護専門職者に求められる研究能力の基礎を身につけることをねらいとしている。

高校1年生から実験的要素を含んだ授業を展開し、学年進行とともに、データ収集、基礎的なレベルのデータ処理、文献検索やクリティークを経験させる。自分達で設定したテーマにそって、仮説を立て、その検証を試みる経験をする中で、科学的・論理的な問題解決思考の基礎を育てていく。最終的には、現在行っている看護研究の質が高まるように取り組んでいく。『看護研究ゼミナール』のメンバーについては、自主的活動を通してこれまでの取組の経験を発展させて、研究論文の作成を指導する。

a. 科学的思考・判断力の活動のねらい

	実験的要素を含んだ学習体験	大学との連携による 専門性の高い学習	看護研究方法
育てたい力	・情報を見極める力 ・思考スキル ・論理的に考える力 ・科学的視点 ・文献検索する力 ・クリティークする力		
高校1年	看護に関連した学びを通して、科学的根拠（エビデンス）の大切さがわかる。	「基礎看護」に関連した専門性の高い講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際を経験する。	
高校2年	授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、看護に関連した実験的要素を含んだ学習経験を通して、看護技術の根拠を確かめる。	「栄養」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際について理解を深める。	文献検索の方法がわかり、初歩的な文献検索ができる。 初歩的なデータ処理ができる。「看護情報活用」で、研究の倫理について学ぶ。
高校3年	高校2年生での経験を発展させ、「研究の問い」を意識したテーマを設定して、実験的要素を含んだ学習を体験する。	「薬理」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際について理解を深める。	設定したテーマにそって文献検索やクリティークを経験する。 研究計画書の作成を経験する。
専攻科1年	文献検索を十分に行い、「食後の血糖上昇実験」を通して、得られたデータを分析することができる。		研究論文を読んで、クリティークの視点にそって考えることができる。 文献検索を行い、事例研究を進めることができる。 「統計」で研究の倫理について理解する。
専攻科2年			研究計画書に基づいて看護研究に取り組む、論文としてまとめ、発表することができる。倫理的配慮にもとづき、患者より同意を得る。

b. 活動の概要

ア) 看護研究方法の学習（高校2年生～専攻科2年生）

S P H指定後、高校2年生で看護技術の根拠を確かめるための学習体験を、プロジェクト学習の手

法を用いて実施してきた。また、授業の中でも計器を用いて数値を測定したり、観察機器を用いて可視化したりする経験を通して、看護実践上の原則について論理的に科学的根拠を理解できるような機会を作った。

高校2年生「看護情報活用」の授業の中で、文献検索の基礎、データ処理の基礎、統計処理の基礎やプレゼンテーションの手法等を学習内容に取り入れ実施する。高校3年生では、「成人看護」の授業の一環として、家族の基礎血圧や家庭の味噌汁の塩分濃度を測定してデータ化し、体格（肥満度）、運動習慣・飲酒習慣・喫煙習慣等との関連性を、Excelで処理し、分析する演習を行う。また、「基礎看護」の授業の中に『SPH看護研究講座』を設定して、各自のテーマにそって文献検索やクリティークを経験させ、さらに「看護研究計画書」の作成も経験させる。

専攻科進級後は、研究論文に触れる経験を多くし、学年進行とともにクリティークする力の向上を図る。最終学年で課す「看護研究」に向けて、実証研究に取り組む一部の生徒については、研究目的や研究プロセスの妥当性などを多角的に考え、学術的価値について正しく評価できるレベルのクリティーク力を目指す。また、専攻科1年生で履修する「統計学」において、統計学的視点や数値の持つ意味を理解したうえで研究論文を読む基礎力が身につく様に、外部講師の協力を得る。

看護研究における、データの重要性や対象への倫理的配慮について、専攻科2年生の看護研究のみならず、高校2年生で行う「看護情報活用」や専攻科1年生で行う「統計」の授業で学ぶ機会を作る。高校では、アンケートや実験など自分たちが被験者になる際にお互いに同意を得ることや、専攻科では患者の同意を得ることを通して、段階的に理解できるようにする。

27年度、意欲の高い高校3年生を中心に結成した「看護研究ゼミナール」の一部の生徒については、最終学年までに、統計的手法を用いて検定処理ができるレベルを目標に研究指導を計画する。また、「看護研究ゼミナール」を、学年縦断のサークル活動として定着させる。

(5) 生涯学び続ける力

新たな医療技術の進歩や社会の変化に柔軟に対応するために必要な「生涯学び続ける力」を育成することを目指している。「生涯学び続ける力」は各々の生徒が持つ「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」を統合し、新たな課題を発見し自ら解決する力と捉えている。これらの力の統合を図ることを目的にプロジェクト学習を導入し、これまで、高校1年生では、「防災プロジェクト（チーム）」と「健康プロジェクト（個人）」、高校2年生で「エビデンス探求プロジェクト（チーム）」、高校3年生では、「キャリアプロジェクト」をシラバスに取り入れ定着した。専攻科1年生で昨年度より取り組んでいる、科目「ヘルスプロモーション」における「ヘルスプロジェクト」をシラバスに取り入れ継続していく。

a. 生涯学び続ける力の活動のねらい

	ポートフォリオの活用	プロジェクト学習	
育てたい力	・イメージする力 ・課題発見力 ・課題解決力 ・コミュニケーション力 ・プレゼンテーション力		
高校1年	パーソナルポートフォリオを作成し、自分が力を入れて取り組んだことを可視化することで、自己肯定感を向上する。	プロジェクト学習の手法を身につける。 「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」を身につける。 防災プロジェクト「常盤高校生に役立つ防災マニュアルを提案します！」 ナイチンゲールプロジェクト「大切な人の健康を守	取組を実践することにより、「イメージする力」「課題発見力」「課題解決力」「コミ

		る方法を提案します！」	コミュニケーション力 「プレゼンテーション力」の5つの力を前年度よりも向上させる。
高校 2年		疑問に思ったことを明らかにするために、自ら課題を発見し、先を想像し、具体的に予測を立てることで課題を解決しようとする力を身につける。 エビデンス探求プロジェクト「エビデンスに基づいた看護技術を提案します！」	
高校 3年	パーソナルポートフォリオをキャリアポートフォリオにして継続させ、看護、医療に関する新聞・雑誌などの記事や書籍のリスト等を資料化し、自分が目指す看護像について意識啓発を図る。	発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 キャリアプロジェクト「夢をかなえようプロジェクト」	
専攻科 1年		看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 ヘルスプロジェクト「成人期の疾病予防、健康増進に向けたアイデアを提案します！」	
専攻科 2年		看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 キャリアプロジェクト	

b. 活動の概要

ア) ポートフォリオの活用（高校1年生～専攻科2年生）

高校1年生には、入学前の説明会でこれまでの自分の成長を振り返り、自分の努力したことを可視化するツールとしてパーソナルポートフォリオを紹介し、入学までに実際に作成する。高校2年・3年生においても、前年度の自分の成長と感じたことや努力したことを加えたパーソナルポートフォリオをクラス替え後の自己紹介ツールとして活用していく。高校3年生はそのパーソナルポートフォリオを活用し、自分の過去・現在から未来を考える「夢をかなえようプロジェクト」を行い、将来の目標を見通し、専攻科進級時や、卒業時、卒業後5年までに、その目標を達成するためにどのような力を身につけている必要があるのかをリサーチし、将来像の目標を明確にする。そして、それらをキャリアポートフォリオとして発展させ、就職後を見すえた活用をしていく。

イ) プロジェクト学習（高校1年生～専攻科2年生）

高校1年生から、専攻科1年生までの学年で取り組むプロジェクトがシラバスに取り入れられ、学年が上がるにつれて生徒の課題発見力、解決力が身につけてきていることが昨年までの成果として上げられており今年度も継続して実施していく。また、プロジェクト学習の2つの学年による合同公開プレゼンテーションが、生徒の異学年交流の場となり、自分の成長やそれからの将来像を見る機会となっていること、また、実習病院の指導者や卒業生など外部の方からの助言が生徒の達成感や自己肯定感を高めていることがわかっている。そのため、今年度も外部の方への呼びかけを増やし公開プレゼンテーションを実施していく。

(6) SPHで「育てたい力を養うための専門家による特別授業」

ア) 「豊かな人間性」看護観を養うための外部講師による特別授業

看護観育成の一環として、対人関係を苦手とする生徒が増えている傾向にあることから、特別非常勤講師と連携し、当該講師の担当授業「人間関係論」の中で人間を理解し対人関係を円滑にし、コミュニケーション力の向上をねらいとする演習を実施する。また、看護と共通するテーマ「高齢者」「小児」「カウンセリング」に関する他職種の専門家による講義を受けることで、視野を広げ、他職種と

の連携について理解することを目指す。

内容	連携先	対象学年
対人関係力 up 講座	専攻科外部講師	専攻科 1 年生
ストレス対策とうつ予防	聖学院大学	専攻科 1 年生
子ども虐待とネグレクト	聖学院大学	専攻科 1 年生
高齢社会の元気高齢者に関すること	聖学院大学	専攻科 1 年生
社会福祉士を目指す学生との交流	聖学院大学	専攻科 1 年生

イ) 「確かな知識・技術」 専門家による特別講座 (高校 2 年生～専攻科 1 年生)

病院や大学で活躍する専門家による授業を、高校 2 年生から学習進度や目標に合わせて導入することで、最新の知識習得や臨床のイメージをつけることを目的とする。導入にあたっては、講座の前には校内の教員が授業の導入やまとめを行い、日ごろの授業との関連づけができるようにする。

専門家による特別講座を受けることにより、病院実習に役立て病院や患者をイメージすることができ、不安の軽減につながることを期待している。

時間	内容	連携先	対象学年
基礎看護	医療現場における感染管理	実習病院	高校 2 年生
基礎看護	放射線の基礎知識、放射線曝露からの防御	エネルギー・環境理科教育推進研究所	高校 2 年生
成人看護	放射線治療について	エネルギー・環境理科教育推進研究所	高校 3 年生
基礎看護	フィジカルアセスメント (聴診法)	実習病院	高校 3 年生
成人看護	がん看護「がんを抱えながら生活する人の看護」	実習病院	高校 3 年生
基礎看護	災害看護「災害時に看護学生ができることを考える」	実習病院	高校 3 年生

ウ) 「科学的思考・判断力」 大学との連携による専門性の高い学習

「看護」に関連した授業の一環として、大学と連携し、大学の施設・設備・実験機器を使用して、大学の指導者による専門性の高い実験・実習講座を受講する機会を作る。

科目	内容	連携先	対象学年
薬理	クスリが作用する仕組みを理解する	日本薬科大学	高校 3 年生
薬理	クスリの作用・副作用・相互作用の基本的な考え方	日本薬科大学	高校 3 年生
薬理	アルコールの体内代謝	日本薬科大学	高校 3 年生
薬理	医薬品と動植物～クスリと食品の違いとその実際	日本薬科大学	高校 3 年生
栄養	塩の働きと過剰摂取について	女子栄養大	高校 2 年生
栄養	思春期のダイエットの弊害、体脂肪率、骨密度測定	女子栄養大	高校 2 年生
基礎看護	食事の援助&口腔ケア	埼玉県立大学	高校 1 年生

(7) 教員研修

a. 「プロジェクト学習」校内研修

鈴木敏恵先生による教員研修を実施する。プロジェクト学習を進める上での具体的な指導を受け、校内で教員が行っているプロジェクト学習は、本校の教員が実施できるようにスキルアップを図る。

5. 実施体制

(1) 研究担当者

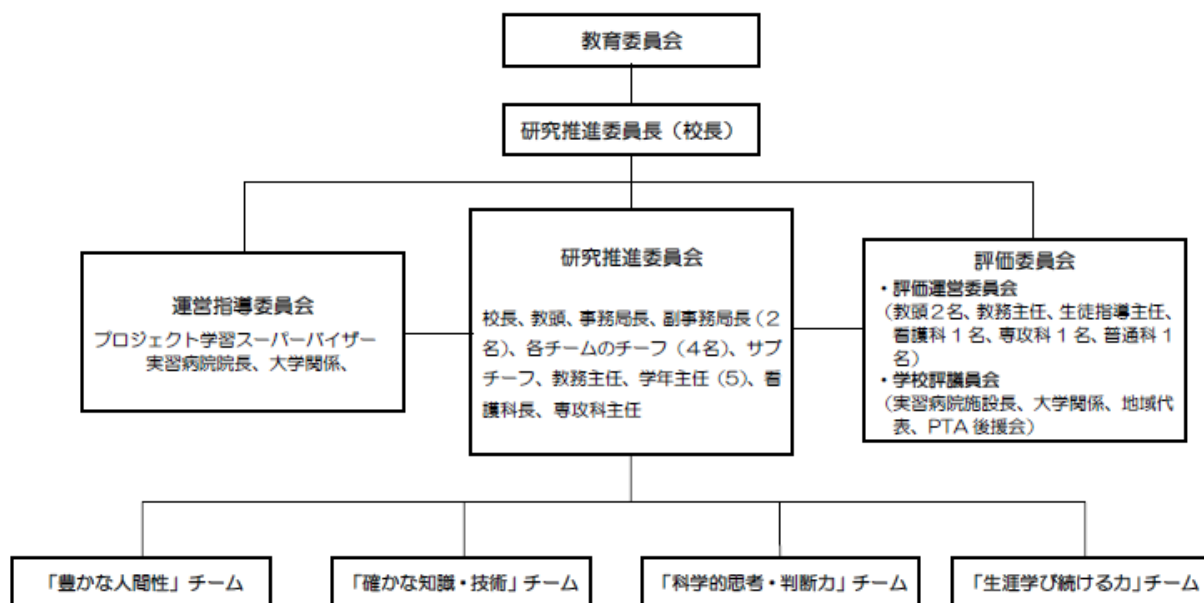
氏名	職名(担当教科)	役割分担
高木 邦子	主幹教諭(看護)	科学的思考・判断力
飯村 洋子	教諭(国語)	豊かな人間性
田尻 茂樹	教諭(地歴公民)	豊かな人間性
三角 定	教諭(数学)	豊かな人間性
高橋 幸雄	教諭(数学)	豊かな人間性
守屋 典子	教諭(理科)	科学的思考・判断力
高見 裕尚	教諭(保健体育)	豊かな人間性
庄子 学	教諭(英語)	生涯学び続ける力
織田 千香子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
伊藤 玲子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
川口 有理	教諭(看護)	科学的思考・判断力
黒川 章子	教諭(看護)	確かな知識・技術
三津橋 佳子	教諭(看護)	確かな知識・技術
松島 御幸	教諭(看護)	生涯学び続ける力
伊藤 千裕	助教諭(看護)	生涯学び続ける力
川田 礼子	教諭(看護)	確かな知識・技術
大塚 真弓	教諭(看護)	科学的思考・判断力
丸山 祐子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
井口 多恵子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
荒井 すみれ	教諭(看護)	確かな知識・技術
高部 恭子	助教諭(看護)	豊かな人間性
両角 理恵	助教諭(看護)	確かな知識・技術
田中 美妃	助教諭(看護)	確かな知識・技術
榎本 聖子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
柴田 江美子	教諭(看護)	豊かな人間性
伊藤 栄子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
村田 ひろみ	教諭(看護)	豊かな人間性
安藤 志津子	教諭(看護)	科学的思考・判断力
牛坂 留都	教諭(看護)	生涯学び続ける力
小平 栄子	教諭(看護)	生涯学び続ける力
井筒 路子	教諭(看護)	豊かな人間性

守屋 有紀	教諭（看護）	豊かな人間性
大貫 由美子	教諭（看護）	生涯学び続ける力
古場 真理子	教諭（看護）	豊かな人間性
横山 研介	教諭（看護）	確かな知識・技術
中澤 瑞果	教諭（看護）	確かな知識・技術
吉田 佳苗	教諭（看護）	確かな知識・技術
山下 実江	助教諭（看護）	確かな知識・技術
垣花 結花	助教諭（看護）	豊かな人間性
工藤 千恵子	助教諭（看護）	生涯学び続ける力
益子 友希	助教諭（看護）	科学的思考・判断力
柴田 優子	養護教諭	豊かな人間性
千葉 尚子	実習教員（理科）	科学的思考・判断力
堤 映子	主任実習教員	確かな知識・技術
新井 久枝	主任実習教員	科学的思考・判断力
飯塚 智子	主任司書	豊かな人間性

（2）研究推進委員会

氏 名	職名（教科）	役割、分掌等
守屋 有紀	教諭（看護）	研究推進委員事務局長
古場 真理子	教諭（看護）	「豊かな人間性」研究班チーフ
中澤 瑞果	教諭（看護）	「確かな知識・技術」研究班チーフ
伊藤 栄子	教諭（看護）	「科学的思考・判断力」研究班チーフ、専攻科主任
大貫 由美子	教諭（看護）	「生涯学び続ける力」研究班チーフ
柴田 江美子	教諭（看護）	研究推進委員副事務局長
三津橋 佳子	教諭（看護）	研究推進委員副事務局長
三角 定	教諭（数学）	教務主任
村田 ひろみ	教諭（看護）	専攻科2年学年主任
安藤 志津子	教諭（看護）	専攻科1年学年主任
織田 千香子	教諭（看護）	看護科3年学年主任
川口 有里	教諭（看護）	看護科2年学年主任
黒川 章子	教諭（看護）	看護科1年学年主任
高木 邦子	主幹教諭（看護）	看護科主任
伊藤 玲子	教諭（看護）	看護科担当
榎本 聖子	教諭（看護）	専攻科担当
千葉 尚子	実習教員（理科）	「記録・広報」チーフ

(3) 校内における体制図



※全員が、4つの研究チームに所属して活動する。

※会計に関しては、事務室の協力を得る。

6. 研究内容別実施時期

研究内容		実施時期											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
豊かな人間性	高1~3	看護観を養う取組											
		地域・外部機関との連携	地域との連携										
	地域活動体験												
	専1	宮城県への宿泊研修	地域との連携							ライフステージからみた生命倫理に関する授業			
専2		看護観を養う取組							ライフステージからみた生命倫理に関する授業				
確かな知識・技術	全学年	e-ラーニング活用授業・協調・シミュレーション											
	技術の統合実践												
	高1・2											実技コンテスト	
	高3											実技テスト	
	専1				実技テスト			実技テスト					
科学的思考・判断力	高1	看護技術に関する実験的学習体験											
	高2	プロジェクト学習の手法を用いた研究的学習活動											
			(文献検索)	データ分析	実験的経験	(実験・講義)						簡単な統計処理・調査・発表	
	高3	研究的学習活動											
		文献検索	看護研究ガイダンス	看護研究講座			看護研究発表会	クリティーク			文献検索・研究計画書		
	専1	研究的学習活動					統計学講義・看護研究講義・ケースレポート						
生涯学び続ける力	高1	ポートフォリオの活用・プロジェクト学習オリ	チームプロジェクト学習「避難所・環境プロジェクト」			公開プレゼンテーション	マイプロジェクト学習「大切な人の健康を守る提案をします！」						
	高2		チームプロジェクト「エビデンス探求プロジェクト」			公開プレゼンテーション	チームプロジェクト「エビデンス探求プロジェクト」						
	高3	キャリアプロジェクト「夢をかなえようプロジェクト」				公開プレゼンテーション	キャリアプロジェクト「夢をかなえようプロジェクト」						
	専1		チームプロジェクト「ヘルスプロジェクト」			公開プレゼンテーション	キャリアプロジェクト						
	専2	キャリアプロジェクト											
	SPH特別講座	高1							大学との連携				
								口腔ケア					
高2			大学との連携			病院との連携	病院との連携	大学との連携					
			放射線				感染管理	栄養					
高3	病院との連携				病院との連携	大学との連携			病院との連携		病院との連携		
	フィジカルアセスメント				放射線治療	薬理作用			災害看護		がん看護		
専1					大学との連携			大学との連携			大学との連携		
					サイエンスアカデミー			対人関係				他職種連携	

※実施時期は、事業計画書提出時のものであり、実際の事業着手は契約締結後とする。

7. この事業に関連して補助金等を受けた実績

補助金等の名称	交付者	交付額	交付年度	業務項目

8. 知的財産権の帰属

※ いずれかに○を付すこと。なお、1. を選択する場合、契約締結時に所定様式の提出が必要となるので留意のこと。

() 1. 知的財産権は受託者に帰属することを希望する。

(○) 2. 知的財産権は全て文部科学省に譲渡する。

9. 再委託に関する事項

再委託業務の有無 有・

※有の場合、別紙3に詳細を記載のこと。

II 委託事業経費

別紙1に記載

III 事業連絡窓口等

別紙2に記載